## 昼休みの日課

平成22年４月に釧路市立博物館の事務職員として異動になり、はや３年が経とうとしています。

博物館の職員となってから、日課になっていることがあります。それは、昼休みの春採公園の散歩です。昼休みは、45分しか時間がないので、10分で昼食を済ませ、残りの時間を散歩にあてます。散歩コースは、職員玄関を出て野草園を通り、春採湖まで降り、そこからゴマツリ岬を目指し旧科学館の裏側に出て戻ってきます。

はじめは、運動不足解消になると思い、ただ何となく歩いているだけでしたが、博物館周辺の草花や虫を観察したり、移り変わる季節を感じることで、事務所に戻るころには心身ともにリフレッシュされ、午後の仕事にとりかかることができるようになりました。

そんなある日、春採湖を何気なく見ながら歩いていると、赤いものが動いているのを発見しました。「もしかして、ヒブナ？」と思い、携帯電話で学芸員に連絡、確認してもらうと、まさにヒブナでした！

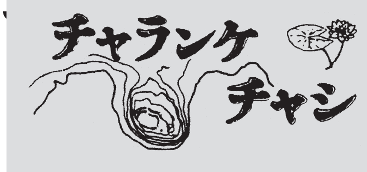
なかなか遭遇できないヒブナに会うことができ、とても幸せな気持ちになりました。

それがきっかけで、散歩のときには、必ずデジタルカメラを持ち歩くようになり、ユキウサギやヤチネズミを写真に撮ることも成功しました。その写真を、博物館のツイッターにアップすることも楽しみのひとつに加わりました。

私が何か発見するたびに、学芸員が丁寧に詳しく説明してくれるので、今までの生活の中では気に留めることもなかった小さなことにも興味を持つことができるようになりました。運動不足解消とともに博物館周辺の動植物にも詳しくなれるとは、一石二鳥の健康法となりました。

博物館周辺には、様々な動植物を観察することができます。市民の皆さんにもそのことを広く知っていただき、また、マイナスイオンをたっぷり感じ、ますます憩いの場所になることを願い、今後の仕事に取り組みたいと思います。

（下山貴弘）




## 新聞連載中

昨年の９月から、北海道新聞（釧路版）の金曜夕刊「記憶の一枚」に「再発見・釧路炭田」を連載しています。第一部は「炭鉱と鉄道」として、釧路臨港鉄道（臨鉄、後に太平洋石炭販売輸送に合併）や雄別炭鉱鉄道（雄鉄）などについて書いています。

石炭を消費地へ。鉄道は船舶とともに不可欠な輸送手段です。また釧路港を結節点とした農産物や木材、石油などの輸送にも重要な役割を果たしてきました。

単に文献で調べたことを書くだけではつまらない。連載を始めるにあたり、決めたテーマについて毎回必ず関係者を取材し、その証言を軸に記事を書くと決めました。春採駅（太平洋石炭販売輸送）の現役鉄道マン、太平洋炭砿・雄別炭砿ＯＢ、釧路臨港鉄道の会、また取材した方からの紹介もあり、臨鉄・雄鉄関係者30人近くにお話を伺うことができました。

聞き手は炭鉱や鉄道の基本システムを理解していなくてはなりません。私は３歳からいわゆる「鉄チャン」（鉄道趣味者）でもあり、趣味で得てきた知識もフル活用しています。また過去の新聞や社内報、文献を読んでから取材に臨みます。そうしてはじめて当時の空気や背景を記録でき、またユニークなエピソードも発掘できます。

ただし、「○○だったのではないですか？」という誘導質問は禁物です。聞き手がストーリーを過度に頭の中に廻らしてしまうことも避けなくてはなりません。これが記憶を曲げたり、あるいは蓋をしてしまうこともあるからです。どこで生まれ、いつ入社し、どんな職種を経てきたか、まずはここから伺います。せっかちに核心へと急いではいけません。

「久しぶりにみんな集まろうじゃないか」。この連載をきっかけに、かつての鉄道マン仲間が連絡を取り合い、ＯＢ会の開催も計画されつつあるとも聞いています。

引き続き、ヤマに生きた人びとの奮闘を、約700字に心を込めて紙面に刻み込んでいきたいと思っています。

（石川孝織）